

椿説弓張月
 殘篇
 参

^13
 3908
 27



13
3908
27

鎮西八郎 椿説弓張月残編 卷之三
為朝外傳

東都

曲亭主人編次

第六十一回

壁を穿て三光源按司と刺人をも
涙決て為朝宰都婆と瘞む

疑心坐す暗鬼と生む物うらへんことあり招けかかすはるを
そのあり。されば松壽の心づきも為朝親子に疑れ之を言語もなれ妻
お似たる千歳お伴とて只假初お締ひしれ。えはしも仇あるりけり。
あつる類お焦燥く。婦が涙かたき。乃ち刃も殺して右なるおのが自
の為あるとがに後の患を除んとて門扉を些引あけて彼鷓丸の
宝劔の瑋放べて身を潜まし候とあるや。あつ雲お吐れて月もさえ
さうさう。小夜深ゆけはしく。軒端を鳴く鼻の舌のこ高丸深丸

味説弓張月残編 卷之三

邊と寂寞にして物もなし。浩如外高。滅裏くくと物のまじりて。の
獄色推破り。とるとへ滑り入るりのあり。松壽の遙く透し視る。その
癖者よ。とひとり点尻るや息もせて窺ひとる。そのあふはて癖者の
中を滑り入りて頭を鶴草と蛇のどく。水が離るる亀のくく。
左手を合えり。右手がえり。亦低く臥し高く這ひあり。竹緑の手
をうけて。只彼春の筍の生出る如身と伸し。内ふ入るととる。その
松壽の肉りとまり出て。揚る刃の光りと共お首とうち落し。頭髻
を纏いさし入る。月影おほくく見れば。是則別人なり。あのみ山乃
麓る。猶夫辰平といふりのあり。さて千歳おかきり。つれて大里按司を
害せん。乃密申り。申すつるとおぼし。這奴憎むべし。と罵りて。蹴か
死骸の懐より。滾くと輾びおれを何する。んとて。あふとれ。八人を

千子の笛のりり。さればこそ支堂のれ。嚮は王女が紀平治をおく。
その処へ。まゝ折山蔭なる樹下。野臥お。團坐して。乃朝を
捕んと。高議まつる。乃竊聞せし。と宣せし。このりのなる。どかれが
千歳が野心ある。いよく推も量らる。と肚裏めて。尋思し。引提
刃。背後か。かくして。件の。を吹く。ほかに暗号を。錯な。といふ声の。
外面より。洩れ。夢えて。夥計の悪棍。玖馬。頓宗。亦彼色の。透し。りり
とも。お。滑り。入り。緑。頬。み。ま。り。け。松。壽。と。辰。平。と。や。え。と。ぐ。ん。と。り。り。
と。ま。よ。り。て。や。よ。為。朝。の。何。処。お。臥。る。容。子。の。い。う。め。と。は。一。眼。く。頓。宗。
が。細。を。購。う。け。て。一。撃。お。む。ら。と。と。ん。ど。切。お。と。せ。な。これ。は。と。い。う。り。身。
を。慌。忙。死。外。と。と。る。玖。馬。が。背。を。乾。竹。割。撲。地。と。倒。る。死。骸。と。も。
に。鮮。血。流。れ。て。耐。る。ぬ。紅。葉。を。庭。に。落。せ。り。松。壽。の。既。に。之。人。の。悪。棍。

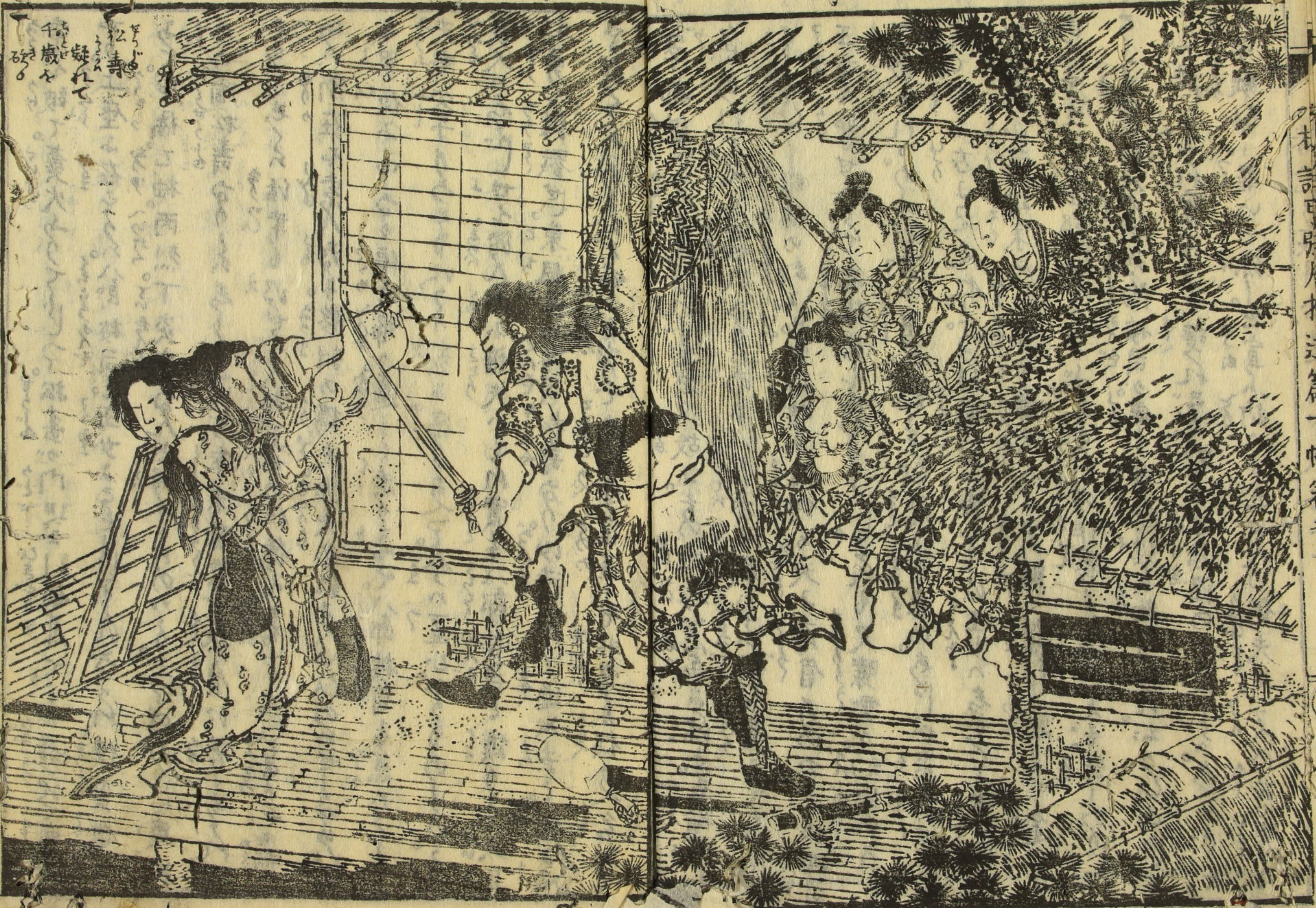
春説号長月合遺篇下 夫卷之三

割く。しつ。ち。千歳。ゆりも。来より。賊婦を。撃漏。さ。赤心
を。彼。君。あ。し。ち。あ。る。は。足。じ。と。あ。ん。か。ん。ら。り。の。裳。入。と。押
域。刃。を。鞋。に。納。る。折。り。外。面。は。足。音。して。斤。折。戸。を。推。用。り。夫。夫
ゆ。り。多。じ。つ。と。い。ひ。つ。入。る。千。歳。の。り。松。壽。の。花。も。さ。ら。り。の。跳。り。出。ん
と。あ。ら。し。が。走。り。て。い。ひ。さ。し。も。え。ち。く。引。は。て。と。さ。ひ。し。て。些
退。れ。物。の。蔭。へ。と。身。を。潜。ま。し。て。こ。ろ。の。寐。刃。の。せ。破。か。る。時。め。あり
と。い。ち。ね。千。歳。の。髪。の。今。宵。今。細。き。孤。燈。の。光。り。も。先。へ。滅。る。露
の。身。に。何。も。ひ。お。く。聖。の。り。藁。の。帯。り。て。引。提。る。之。并。入。の。大。執。旅
客。を。さ。入。宿。せ。ふ。夫。婦。が。外。へ。り。は。草。か。き。集。て。も。ま。ご。足。ら。ぬ。且。願
の。炊。の。粟。を。買。して。さ。ら。び。も。夜。を。添。し。う。り。み。な。も。や。睡。り。の。ひ。ら。め。と
ご。り。び。ら。つ。引。披。る。板。戸。を。走。る。刃。の。電。の。さ。や。と。叫。び。て。飛。退。け。が

疊。う。け。て。打。太。刀。の。下。を。滑。り。て。受。ら。し。の。氣。中。の。精。栗。身。に。降。か。る
邪。慳。の。刃。の。物。も。や。ね。ひ。ま。ら。ん。悞。あ。ら。か。の。勸。解。も。せ。え。假。初。ま。ら
小。の。年。夫。婦。送。ふ。り。の。あ。ら。か。め。顔。赧。せ。し。り。か。れ。何。を。恨。ま。て
か。く。す。で。強。顔。人。と。な。り。あ。ら。と。い。り。せ。も。あ。ら。と。眼。を。睜。し。刃。の。邪。を
さ。ら。ふ。向。へ。夜。は。あ。ら。か。ら。い。ひ。あ。と。せ。辰。平。玖。馬。頓。宗。が。首。を。既。不
軀。を。さ。ら。れ。て。彼。起。再。對。せ。る。と。な。ほ。ん。さ。や。と。い。れ。ま。き。高。く。馬。の。亦
秘。り。う。を。受。な。が。と。執。ゆ。遂。に。欲。裂。れ。御。宗。難。し。逃。ち。と。裳。踏。れ
て。轉。輾。弗。と。對。離。る。野。音。結。ぶ。黒。髮。忽。地。乱。と。燒。白。刃。の。下。破。彼。此。に
臥。け。て。起。あ。る。右。さ。の。肩。より。乳。の。下。く。けて。破。れ。て。撞。と。仆。れ。け。る
舞。の。や。り。を。闚。窺。し。れ。為。朝。の。紀。平。治。の。サ。娘。屏。風。を。ひ。か。り。王。女
舞。天。丸。り。あ。ら。も。に。端。近。う。出。て。松。壽。お。對。ひ。言。と。行。と。け。め。た。が。ら。ぬ

東風平按司の誠忠の賞とて疑ふへに既に間謀の癖者
 欲て六段とてし恩愛を棄癡情より引きたる又この千歳を
 煉の太刀さち勇あり義あり志ありはけく人と彼所
 殿窺とるふ燈火の光ハ明とれて千歳が姿を障子へうつし
 推量おたがふことおろ亦驟雲が幻術あてこの婦を仰りし足下の
 を蕩とて朝を替せんとあつても謀るものとあはし死骸と屢檢
 多へと字ふけしうを替へ梅壽の構の指燭しつとまりうごに足
 せられの替り跡はまれば骸は只一本の卒都婆となりて中
 管切口の太刀跟えゆる羅漢杖こくくといふとさう寺りて主後
 ぬくび怪こりの松壽ハ卒都婆とらか入しうちえ一とて眉を頻め
 へは是いゆる比生路が菩提の為某竊は越えたる石橋は建

卒都婆く人おあつれととる故ふその姓名を字と係と五輪の上
 節のれへも忘れづらんあはれ原末千歳の生路が靈あてとめ
 る人梅魂の幻と出て山路は伶俚る夫お奇眉りのなりは按司
 王女を替せんとして悪棍おをぶかしてこれ又驟雲が幻術の
 不欺それあつれ味審とあつてび惑と亡毒のあはし卒都婆突
 立て右方よりええれとさは疑ひハ散中より王女の志をく嘆息
 姑場の山蔭越末の石橋母廉夫と生鶴が替り跡とて途まり
 めくと立一卒都婆をるるど外作善とありはえを悲しかりしが
 うへ来てなれ人の乃陶按司が建一卒都婆の物がりねおのひあじて
 人を疑ひ罪いとゆると宣ふ折うと五人の舊夫ホ二人の荒男



千歳を疑れて
松壽

替り長月合遺書下夫卷之三

替り長月合遺書下夫卷之三

東を被て。炭火ありて。松島が門辺に引揚奉て。さき磯にて。東風
あり。上座小在とらる。八郎按司と。王女こそは。しるんぞ。され。僕も。猶夫
あて。神橋乙。抽丙。烈丁。炎春。わんと。あつ。り。の。なり。あ。の。あ。じ。を。東。風
平の。陶。松。壽。あり。と。あ。ら。さ。ら。じ。か。年。来。曠。雲。が。暴。虐。に。苦。し。め。ら。れ。て。
あ。ら。く。あ。ら。く。活。業。も。ほ。せ。と。八。郎。王。女。の。仁。徳。を。慕。く。あ。し。き。り。て。あ。頼。小
おん。所在。を。索。ん。ぬ。影。計。の。猶。夫。樵。夫。あ。れ。え。い。ひ。あ。せ。し。ゆ。ゆ。じ
甲。夜。あ。あ。る。方。偏。婦。が。遠。く。走。り。ゆ。て。八。郎。按。司。と。恙。な。ら。ず。
夫。婦。父。子。り。り。と。も。い。う。家。小。宿。り。あ。て。今。の。匿。い。づ。ら。も。あ。ら。じ。か。
良。人。へ。あ。ら。じ。世。を。踏。ん。ぬ。小。樵。夫。の。こ。れ。實。と。八。郎。按。司。と。僕。の。く。大。臣
利。勇。と。誅。戮。せ。東。風。平。の。按。司。松。壽。あり。沙。達。い。う。逆。に。去。り。順。に。及
そ。れ。ら。う。め。ら。る。と。あ。ら。す。志。を。述。宿。直。く。非。常。并。仗。又。名。と。も

揚。家。も。起。さ。ん。ゆ。の。只。この。時。小。こ。と。い。ふ。飲。く。俄。頃。影。計。の。者
ご。も。次。集。會。て。縁。由。告。ぎ。と。ら。る。に。辰。平。玖。馬。頓。宗。未。小。八。申。大。七
とい。ふ。五。人。の。猶。夫。後。り。何。処。へ。ゆ。き。ゆ。り。け。ん。緯。半。は。て。え。え。と。あ。り。ね。
彼。り。告。首。と。れ。と。り。や。と。い。く。公。り。と。さ。さ。馳。と。あ。る。こ。と。後。再。し。と。
ま。ら。者。奴。亦。往。方。賊。あ。ら。に。松。阪。の。は。と。り。ふ。て。この。未。小。八。と。申。大。七。か
ま。ら。と。い。ふ。な。り。と。あ。ら。あ。い。れ。され。は。と。て。矢。庭。に。縛。め。る。辰。平。ホ。と。の
往。方。い。う。あ。し。責。問。の。の。り。の。ご。も。苦。痛。に。堪。え。五。人。五。人。謀。し。あ。ら。じ
と。辰。平。頓。宗。玖。馬。少。の。密。に。為。朝。刺。殺。して。王。女。を。生。拘。ん。為。旅
宿。に。越。死。又。お。の。れ。と。あ。人。の。中。緯。の。越。死。越。来。の。土。官。小。游。ん。と。く。
この。処。まで。走。り。ゆ。る。あ。忽。地。後。方。より。千。歳。が。告。ぐ。い。海。小。公。と。あ。り。と
あ。ち。て。仁。義。の。良。好。を。冠。せ。ん。と。な。ら。ず。望。ま。ま。と。い。ふ。地。よ。よ。れ。死。す。と。あ。ら。じ

すまじきも。辰平政馬、蝦宗のやまら良人、おぼれり。と、おぼひかき
られてええれ。手足俄頃、中麻呂とて一歩も運ひ動し。これ
もゆかて丸林さん、と、押立る。やうし。今ま、あへ、欲、或、心、く
三徳兼、これ大将、死、ひ、な、と、謀、り、これ天罰、かくも速、なり、後
と、吼、面、も、せて、賤、格、も、ど、しく、直、辰平、お、追、ひ、留、入、と、く、賤、て
推、系、一、信、り、と、叮、嚀、も、瀆、り、り。こ、一、帯、再、居、ま、れ、り、の、主、従
これを、ゆ、て、面、の、あ、い、嘆、息、心、。ま、て、千、歳、の、嘘、雲、か、幻、術、の、あ、い、
さ、り、け、り。こ、生、命、の、窮、く、自、魂、の、卒、都、婆、子、憑、り、良、人、の、奇、眉、の、貞、節
忠、義、を、盡、と、と、生、る、財、も、い、や、ま、せ、し、火、神、の、火、の、疑、り、と、夫、の
逼、り、て、移、せ、し、火、情、の、と、恨、ま、け、ん、死、し、の、後、ま、ね、れ、衣、を、被、り、別、を
日本、の、傳、稀、なる、貞、烈、の、女、の、鑑、と、な、る、ま、ま、に、あ、る、人、の、幸、さ、ま、ら、
過、世、の、る、れ、報、の、後、い、ひ、あ、ま、ま、孫、ど、い、と、と、誠、の、言、語、も、あ、い、れ、て
亦、せん、と、も、な、かり、り、と、且、し、て、為、朝、を、猶、夫、亦、承、り、り、と、い、ひ、こ、い、。彼、ホ
此、一、も、り、せん、千、歳、を、お、ぼ、せ、ざ、り、彼、の、黄、泉、の、客、なり、と、も、その、誠、心
を、ま、ま、か、ひ、り、賊、婦、悪、婆、と、罵、られ、良、人、の、刃、に、か、た、ぬ、れ、今、般、の
こ、ろ、推、量、れ、ら、る、朝、が、悞、なり、箇、様、こ、の、り、あり、と、辰平、政、馬
蝦宗、が、潜、ひ、り、て、松、壽、小、頼、れ、り、又、彼、千、歳、の、松、壽、が、前、妻、真、鶴
が、自、魂、なる、の、一、五、十、を、説、き、し、切、られ、卒、都、婆、い、せ、る、へ、は、猶、夫
亦、を、駭、然、と、或、の、怪、し、或、の、悼、し、と、感、涙、ゆ、れ、拭、ひ、ぬ、れ、と、中、甲、橋
の、あ、い、ち、ら、み、て、班、を、出、真、鶴、命、婦、の、こ、ろ、雄、しく、曩、お、王、女、の、中、城、
不、あ、ら、ま、り、と、北、越、来、の、石、橋、お、思、少、年、亦、大、防、の、戦、ひ、討、死、さ、る
親、忠、苦、節、の、世、間、み、か、れ、り、と、その、北、の、風、声、を、標、致、尋、常、の、勝、色、は、大

すまじきも。辰平政馬、蝦宗のやまら良人、おぼれり。と、おぼひかき
られてええれ。手足俄頃、中麻呂とて一歩も運ひ動し。これ
もゆかて丸林さん、と、押立る。やうし。今ま、あへ、欲、或、心、く
三徳兼、これ大将、死、ひ、な、と、謀、り、これ天罰、かくも速、なり、後
と、吼、面、も、せて、賤、格、も、ど、しく、直、辰平、お、追、ひ、留、入、と、く、賤、て
推、系、一、信、り、と、叮、嚀、も、瀆、り、り。こ、一、帯、再、居、ま、れ、り、の、主、従
これを、ゆ、て、面、の、あ、い、嘆、息、心、。ま、て、千、歳、の、嘘、雲、か、幻、術、の、あ、い、
さ、り、け、り。こ、生、命、の、窮、く、自、魂、の、卒、都、婆、子、憑、り、良、人、の、奇、眉、の、貞、節
忠、義、を、盡、と、と、生、る、財、も、い、や、ま、せ、し、火、神、の、火、の、疑、り、と、夫、の
逼、り、て、移、せ、し、火、情、の、と、恨、ま、け、ん、死、し、の、後、ま、ね、れ、衣、を、被、り、別、を
日本、の、傳、稀、なる、貞、烈、の、女、の、鑑、と、な、る、ま、ま、に、あ、る、人、の、幸、さ、ま、ら、
過、世、の、る、れ、報、の、後、い、ひ、あ、ま、ま、孫、ど、い、と、と、誠、の、言、語、も、あ、い、れ、て
亦、せん、と、も、な、かり、り、と、且、し、て、為、朝、を、猶、夫、亦、承、り、り、と、い、ひ、こ、い、。彼、ホ
此、一、も、り、せん、千、歳、を、お、ぼ、せ、ざ、り、彼、の、黄、泉、の、客、なり、と、も、その、誠、心
を、ま、ま、か、ひ、り、賊、婦、悪、婆、と、罵、られ、良、人、の、刃、に、か、た、ぬ、れ、今、般、の
こ、ろ、推、量、れ、ら、る、朝、が、悞、なり、箇、様、こ、の、り、あり、と、辰平、政、馬
蝦宗、が、潜、ひ、り、て、松、壽、小、頼、れ、り、又、彼、千、歳、の、松、壽、が、前、妻、真、鶴
が、自、魂、なる、の、一、五、十、を、説、き、し、切、られ、卒、都、婆、い、せ、る、へ、は、猶、夫
亦、を、駭、然、と、或、の、怪、し、或、の、悼、し、と、感、涙、ゆ、れ、拭、ひ、ぬ、れ、と、中、甲、橋
の、あ、い、ち、ら、み、て、班、を、出、真、鶴、命、婦、の、こ、ろ、雄、しく、曩、お、王、女、の、中、城、
不、あ、ら、ま、り、と、北、越、来、の、石、橋、お、思、少、年、亦、大、防、の、戦、ひ、討、死、さ、る
親、忠、苦、節、の、世、間、み、か、れ、り、と、その、北、の、風、声、を、標、致、尋、常、の、勝、色、は、大

及へと偏目なりとの言も傳くを死しての後小魂鬼の幻小あつたて
 良人の直愛苦み慰むるこれぞ世の稀なるに。さうその名も十歳
 と徐して偏目なりしハこそうは縁と賢くして誦れハ舜天丸翠都婆
 小指して往昔もかる例あり五體一象は五輪の塔婆小木の節一ツあり
 故に偏目と云ふるさうんと諭し多くハ陶松壽もこぼれ粟と搔は
 て彼邯鄲の五十年ひよりそをさすは鶴が共餌をこくに食残さ鶴の
 齡を象りて十歳と名告れとも命短くなは魂の假小答とあらわす
 添外むら外くなく。それを松壽と云ふ好から。さそ愛おむも昔り名
 のさの朽ね板庇あは宿の母ありなら舊の妻子と志すを賊婦
 の為ふ欺れとの狗堂小階の杖と只管怒りて衝つけしその宝劍の
 威徳はちそれと志しも教をさめあくそ不立文字の没字牌珠を

像見ハ正木の翠都婆外も後々一物四大破れて本末空まは
 海るとも志し受けあんが没後の誠もく。これも面をちとせしと在
 けるさく物いひうけて泣ね歎き成りひ女は舜天丸まことく嗟歎して
 年少けれハ智も深く人を忍れさ。よくも察せはかる夫婦を
 疑ひハ親をさすの故少のあれと類汗し。羞るも堪へり後悔
 そこふさちかじしと人を賞するかとさす。紀平治の臉をさす。一人
 田土と寫しなれ牌を送して拾ひせし今宵の宿りと由縁の家と
 暗くはへきなる人。あし判じて忠臣烈女を苦しめハ離君のあん
 恨みゆき。こま老の僻さしと賸話かへぬ。招魂月夜鳥も
 梢をさされて良れ。常成告るや。と玉女を空成らち俾たあは
 好むむすし。かさ成らあむつけて痛し。美髯が月の形をさ。生

ひじり山雞の尾上隔て七年あまの良人とひとる卧房入るを
死して今亦妹夫の契り成締ふ公の手跡もさうなく降る草の原を
もいづこかめ魂鬼いまごころの土とまきまきさういひ姿を
て夫とさひも遂よけとかれは説きあふそ松寿を回目月よあま
忽地形をおろしめて真踏くるめいとうて悼まあまもそのか
み既おその誠心をあろいあはれてかくまひまきまきあま
魂もさそ本意なりか兄岩も物いふの誘ありさうあまの端
と王女を凍りて恭しく鶴丸の宝劔を為朝日返すなうそれ
為朝これを受とりて劔の徳ハ身成衛りねの意も隨ふのあり
さうよよつて智仁勇あはりのハ雙言と伐り狐疑さるりのハ方
伐るそれら夫故を賞せん為又今宵のさうりて後の誠とせん
鶴丸と更く生踏の太刀と喰ふべ現もやつる日の本の血着の
宰都婆の来りゆれと老婆が愚直より地故を脱れ今も鶴が血
着の宰都婆とつが疑念より貞女に誣かの愚也及びがごと
只この宰都婆と亡骸代て山路不瘞らじこれもさう送らん
とて竹縁まき出て甲構乙袖あみうち對ひはホがらうと賞
とあふあまりのありあんより直も俱とさういおりの後者ま
て却便さしこれ亦想を揚れとゆふさうその知へまこれよ
又未小八申大七の生踏が追鷹ふ命助けてほまきとて縦はホ
謀れおとて為朝を替はんや不我の富貴が願あふさう
お告あし賊軍の御導とてあまもまよしと仰もあは刀
後と縛の常切去る人ハ二人の悪棍首と叩れて数回拜伏し吾門既

ひじり山雞の尾上隔て七年あまの良人とひとる卧房入るを
死して今亦妹夫の契り成締ふ公の手跡もさうなく降る草の原を
もいづこかめ魂鬼いまごころの土とまきまきさういひ姿を
て夫とさひも遂よけとかれは説きあふそ松寿を回目月よあま
忽地形をおろしめて真踏くるめいとうて悼まあまもそのか
み既おその誠心をあろいあはれてかくまひまきまきあま
魂もさそ本意なりか兄岩も物いふの誘ありさうあまの端
と王女を凍りて恭しく鶴丸の宝劔を為朝日返すなうそれ
為朝これを受とりて劔の徳ハ身成衛りねの意も隨ふのあり
さうよよつて智仁勇あはりのハ雙言と伐り狐疑さるりのハ方
伐るそれら夫故を賞せん為又今宵のさうりて後の誠とせん
鶴丸と更く生踏の太刀と喰ふべ現もやつる日の本の血着の
宰都婆の来りゆれと老婆が愚直より地故を脱れ今も鶴が血
着の宰都婆とつが疑念より貞女に誣かの愚也及びがごと
只この宰都婆と亡骸代て山路不瘞らじこれもさう送らん
とて竹縁まき出て甲構乙袖あみうち對ひはホがらうと賞
とあふあまりのありあんより直も俱とさういおりの後者ま
て却便さしこれ亦想を揚れとゆふさうその知へまこれよ
又未小八申大七の生踏が追鷹ふ命助けてほまきとて縦はホ
謀れおとて為朝を替はんや不我の富貴が願あふさう
お告あし賊軍の御導とてあまもまよしと仰もあは刀
後と縛の常切去る人ハ二人の悪棍首と叩れて数回拜伏し吾門既

本言... 中巻二

自の非を去れば何地へ罷えき聖の山路の御導に召れりと勧解
あけり。かくて為朝いそがしき人へ王女舜天丸りるも宿りて野辺
送り。罪も極楽のらちなり。ばこそかとうらな軍都築引提
紀平治が先へまゝと逆縁の松壽の袖の香拂ひ夜のまゝ海死大將の
恩恵を今更小具加のりりて亡妻の年経く後の葬の棺よめぬ
松原茶毘の煙の峯の雲暮を石傍の水葬と今あふらて墳墓や
玉を瘞りて我来山古跡を遺と夫婦墳の由縁の巻ふええり。

第六十二回

城山中も毛鶴寛家と張る
天孫朝も阿公首級と賢と

屏風の敗りといふも骨は存と忠臣妻といふも志移らむ
さても鶴亀同胞の長川の敗軍も辛く圍殺脱大將軍の往方

を索ちて朝へ嶋袋めて猛火は焼れ大里の城さく落されて王女も
をや替れあひぬとせえり。バ送恨の涙禁めぬとせめて頭身の息乃
内所公の所在を索ねて母新垣が寛を雪め首里の舊都へ潜して
矇雲が出れを窺ひ仇を替りとも替りとも君父の恩も替りて逐小
佳楚嶽小身以駭し。捕箭を負ひ半弓と挟み僅小禽獸以射で露
命と替死。とうくをれ行ふ。その年も暮れり。かくて三月の中旬より
か。有。一日。誘。が。い。や。う。が。同。胞。不。思。議。も。存。余。て。涼。山。の。奥。に
隠れをれば敵もあられとといふとも亦身方の兵も環會よとが
も。千。餘。騎。の。軍。兵。が。一。騎。も。残。り。な。し。な。れ。る。も。あ。ら。じ。我。も。等。し。く
存。余。て。時。を。ま。ら。り。の。ま。ら。り。に。や。浮。世。も。遠。く。潜。ふ。身。の。首。里。の。風。声。を
夢。く。ご。あ。り。た。り。た。か。き。と。い。ふ。み。せ。ん。あ。り。あ。ま。真。和。志。洞。の。名。を。り。な。れ

春説... 夫...

むりりて出つ。この処より五穀あり。これまゝのさうりや。といひしは
おせが腰なる餉袋も忙しく受おきてその恵をよめるこひやえ。
舊の尾上へ十町あまのまかりつ。亦あやう。今の童子が高教へ
何となく氣阜くんえり。その年才を推量れ阿公が奮ひ去る。
王子と同庚なれど。あうが彼草舎の阿公が隠宅あるや。あひ
あひされそのの遅くて他よとそを鈍まられ。あうび彼処に赴て
あじがゆるを張み。あうりく。とひとり点既亦谷産へと引せ
ば。日をもや暮る月いまだと忽地も路も迷ひてゆけども。草舎を
んぞ。こゝろあまそく。焦燥く左軟右れと同いあも人跡絶る深山
を彼首へまの此首へ走れば。砾も跌れ荆棘も足を傷られて身ま神も
勞れ。且く株も尻をうけて玉兔の走ると候ると。亥中の月やう

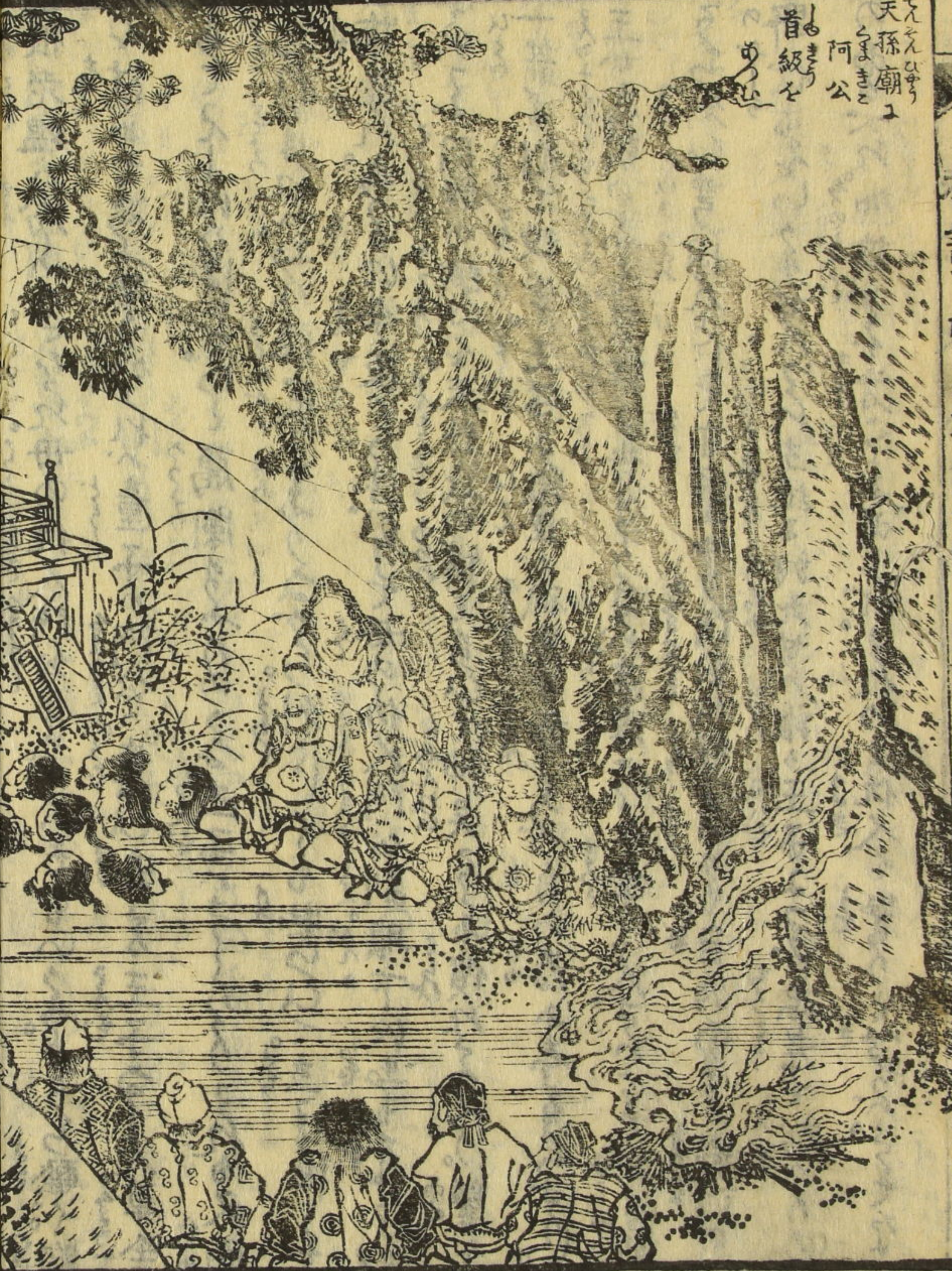
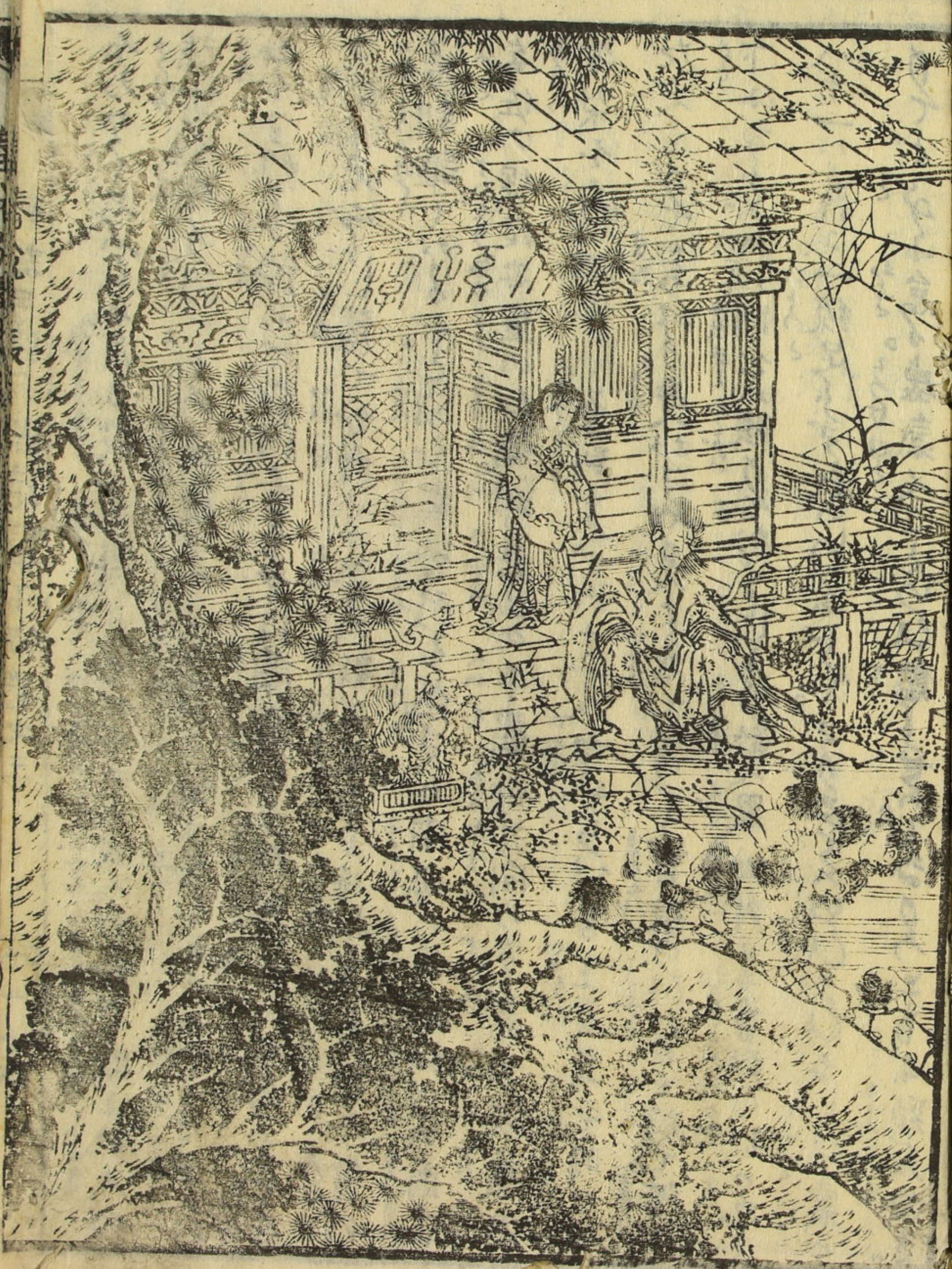
ふ峯がなれり。昼のてく。いと明くたる。頭を廻して彼此を
見之れ。ハ前面一坐の古廟あり。うち仰てこれをん。柱斜
に薨墮簷傾れて寄生高く。石像の拍狗傾き倒れて谷落さん
とぞ。離獅のてく。木偶の隨身采を刺て釜より出る。餓鬼の似く
懸真のなしく鼻の糞を塗れ。鶏尾のつづ。蜘蛛網に纏る。僅に金字
の扁額。之月影。輝きて天孫廟と云ふ。これハ鶴を心地。身と起て
は。ちうちう。糸のつ。原米この神社ハ豫てやく。天孫廟なり。是ハ
つが國の宗廟。まう。はせとも。逆臣妖賊が。為。國家敗れ。久し
四時の祭祀を。願。い。とい。さう。蒸れ果て。狐狸の棲となり。る。る。恭平
の。付。なり。せ。ハ。ト。び。ハ。あ。う。り。し。も。つ。が。同。胞。を。少。く。よ。り。國。難。は。あ。ま
む。福。を。あ。う。り。さ。れ。今。ゆ。り。か。く。宗。廟。を。拜。し。も。ん。こ。七。幸。々。也。

とひとりごらつ草灰また石湯を搦びくまきと清め壞れごとく階小
 登りて再拜して念どく世ハヤ澆季及やとしくも神威今も不亡
 ありけの微臣が忠孝の志を憐れ多くて母の仇人阿公が隠宅へ導され
 夙志を遂はしむ人しあう六王子と恙なくそのちりて為朝王女の素
 懐を果し。疎雲を討滅して廢れ國が興とて仰ぐところハ神明の
 擁護よまれと身を平伏し念どるゆ半响むるややくと頭を搦
 不知紫内の山中は通骨索めぐるんより。神殿も下扱さあうと聖
 つもてえ一谷蔭の草舎を索んことあひえしてまわりの麓で扉を
 かけ。披れく肉へぐんととさねみ柱傾れされがや力に究りて引け
 ども固くもせん定なられば簷下に吐く白嚮と童子がふへとる稚子
 とり出でこれを嚼み餓され味いふうもあはげうが身かたる艱苦や
 ちひやうや才かしの恙なくてこの山へくまよしとち懐急さま
 瞻する空の雨雲の天しきまねに月燈燭うた滅され猛ら闇夜ふ
 かりありの浩如し前面より蕉火駭ありてし。此方をさしてすめり
 あり鶴の遠みこれを見て人跡絶たれ山中ハ小夜深く人夥聚ひす
 そあうりは悲しけりる國の宗廟天孫氏の宮社も山賊の寨とあり
 けん。潜びく物の音息をえんやと彼此をえん久ねハ神殿の扉開され
 身を隠して隈もさしとさぬかうさぬちひやつ。鳥夜あも光る扇額
 らち向上く弓弦を衝破れ籬子も足踏うけて鈴の緒も推りは
 楯の上も攀登りて額の陰も躲れてり。さる様も統松の光りちかく
 うるまうに荒男ハ五六十人皂衣も皂衣も頭巾も戴られ篠脇當
 本皮の脚絆して長れ刀を跨られおのく左手に火を扱て右手を

春見り長月合遺篇下巻之三

人の首を引提古廟のほろりたる髪ひまの懸て続々とら累もて舟火
 としされ天結蔭くつと暗けれどその火の老り母八方を照じて毛の
 宛せども見ええつと下野の荒男ふの二帯も居なぐれつ一人班
 を歩く社既なる巨木の虚をさし覗き居る涙御はしめへりや豫て仰を
 奉りたるは祭の執事を持とせり出まを多くと啓されば虚の中より恋
 ちく年の終ハ七八十むりなれ老女の雪より白髪髪うたふとあつじ
 大和錦の袿して緋の袴の裾まぐくひうし八才むりなる男の童のよだ
 携て徐中りおまよと上座お推なほりて半朽禪さる階の上へ童子とこれ
 居その刃の中波お丸をうけて左右をうらえなりされ面魂物凄じらして
 小いと逞し鶴の扇額の間より足代えて且怪と且飲ひこの男の童の面
 彩の嚮小谷蔭なる草舎もてこれ小稚子と務りたるりのわたがらと亦

彼老嫗の紛ふささなれ母の仇人阿公なり。このそもいふもとら騒ぐ胸
 を結めてるよやう。かれは童子ハ阿公が奪ひ去る王子や人草舎
 めてえーにいはしていと鷹蘭もふりのる。王子はさうなりなれも又面
 忘れなれハおん隠宅よまかりながら。外にしくも物いひてまゝはしとて
 悔しけれあるに今夜とくびして母の仇人阿公副眼下にもも耳はる
 る。つが同胞の誠心を天孫氏の憐さひて神冥くも償れと多へ。誓を
 一箭射て殺して王子も微臣が孤忠を訟よう。自の為お志すまのまじり。
 王女鳥朝の志を言解よ告まらう。忠孝こゝ全う人。まんとく。弓前
 ろら刺し。弓固人として亦あやう阿公が好らるも。目にあまる影計の
 野伏おをいふせん。これ支地は討死せん。誰か王子よ。忠孝と訟らりの
 のあるべし加梅。うさうさあふ。これの仇人を誓りとはつらさそな



天孫廟
阿公
首級

天孫廟
阿公
首級

ちかたつくもふらぬ。用い投ぐ器をりせせどと。古人の金言既し仇人の
 隠宅を探りゆて。その進退さへ定れば。袋中物をあぐり如しと早れ
 ちをそれく凍めて。さへ音もせぬ。幽窺より。阿公のあれは。あふと左
 上右見えず。し豫て分付する。贄の數不足と。准依し。これ欽今宵の
 着到誰なるぞ。と問を衆皆臥を低さ。い園場の東紀松川の南吉
 左佐の塚造安里の紅衛津嘉山の平霸仲井間の空壽古波藏乃
 安策をいじめ止して。着到きて。六十一人命せられる。生首うつて。時日
 たぐさりて。あれり。受むる。あまんと。煮て。あつく。首級の。長吉と。纏て。階の
 下。あふ。あれ。阿公の。頭り。をか。と。し。より。數へ。果分付する。首級の。數へ。九
 八十一。後。一級。足。さ。げ。れ。い。ふ。ふ。ぢ。や。さ。り。と。て。い。ひ。が。ひ。し。陰。囊。へ
 り。て。ど。ろ。ろ。あ。高。の。毒。氣。人。よ。ら。い。ひ。懸。ら。せ。ん。と。り。も。も。頭。取。搔。き。

俺們四五日已前より。真和志の属村いささ。長川のほとり。まで。毎夜。お
 徘徊。あ。れ。も。露。雲。処。々。小。園。を。居。て。人。の。夜。行。を。留。し。は。踏。ゆ。り。の。稀
 ち。て。八十一の。數。を。滿。せ。僅。一。級。缺。と。ん。懈。う。ふ。の。つ。は。今。一。兩。日。と。ゆ。え。ま。り。
 その。數。百。も。滿。し。つ。さ。許。容。あ。れ。じ。と。啓。せ。れ。ば。王。子。い。い。ふ。大人。あ。ち。り
 ふ。や。よ。阿。公。九。世。知。せ。ん。と。て。三。年。お。及。ぶ。艱。難。苦。勞。その。ま。は。若。し。れ
 と。罪。な。ら。ぬ。の。首。を。切。り。祖。神。を。あ。ら。ん。と。も。これ。を。よく。受。め。ん。や。今。夜。の
 ち。の。止。ね。し。に。宜。へ。頭。を。掉。倍。歳。と。ん。仰。せ。う。お。傳。く。ま。く。日。の。本
 ふ。野。猪。の。頭。七。十。あ。ま。り。の。贄。に。あ。る。神。子。あり。亦。武者。修行。を。猛。者
 と。園。の。神。社。へ。首。級。を。向。り。の。め。あり。今。この。贄。も。それ。お。ま。じ。く。人。參
 果。の。神。事。と。名。け。く。され。ば。往。古。天。孫。氏。跡。を。この。山。お。無。と。し。ま。ひ。い。て。

載。一。万。七。千。七。百。九。十。餘。年。園。王。子。を。か。さ。へ。て。九。六。代。の。今。お。當。り。と。

開巻 大明三流志 巻の八十九 琉球国土 産の條下 小云脚録 樹の橋に似 二重窓の 入り本邦 人々 一々 一々

ふふ百日に満たれば結願の誓をよわらせんとてひふふその数足も祓ふ
ふふのくちして快くもびとかくより後更團あんに中罷りて今一人が首を
削ぐ持たれそのゆりう等團あんに汝も首を削ぐ誓の数一元
ふふをぞとくくひえねとつそじしうれが阿と意つ准後の続去より出
て無火もさしうしこまされ先へと群がら南の山路へ走去折ぐと驛兩
組の降すはあどろくと雷鳴も電間みして漲あつる谷川の音も
阿彼羅の関の声のくぐりと心へ物もせと阿公の處へ王子を抱れ
て階も主在彼野伏ホがぬりこるを今うくと待たぬし路は目今野伏
ホが走り去るとして帰るに故に誓へた仇ハ阿公のこの隙も宿志は遂
ごの何の時を期とせれと思ひ定め袖まは揚飛下人ととこりしう
つりば
船火のや降る雨も悉らち滅きて善悪もこりぬ鳥夜となりやね
阿公を解へんとて王子は傷けもれハ忠なり又孝なりととく雨膏
て月も出よととくあひ似と暗れより暗れよ迷ふ壯士がどろり放と
焼刀の鞘を握てとくもくもり。

第六十三回

身を救ひ祖を認む落月弓
因を推し果を談を解手刀

小雨宴時して雨歇まされ果の雲の流はくまに月こそ物後あふ
ふふくにおがえりかははるる竊は飲びて野伏ホが立ぬれば後悔はくハ
ふふに名告うけて替ふやととひ定折しゆれ忽地前面の尾崎
あり。蕉火の光り。二つの閃れ出るととに動揺めく声の驟しくとくの野伏
ホがとりの旅客を捉つて手を取り足をうん魁之宙に引立て喘く走り
ふれハ阿公ハ王子と忙しく扛あひして階の板を半をりこらふれる者の

津嘉山の平朝仲井間の宜壽古波藏の安樂... 拔群の働れ賞を... ともお彼旅客を破と引とえ... 仰黙止ごされば... 尾のあまご... 庭外画へ引揚出... こそおてゆるめ時... 壯俊と捕まし... 羽を縫れ... 賢子神慮も...

賢子神慮も... かつとやつが面を... 嗣窺て大死... 後々んとらん... 阿公とちり... 呵々として冷笑... 小軍敗退し... むくりには... 遂んが為驗...

の不^ふま^まの峻^{つら}れ^れの^の疲^{つか}れ^れ夜^よ興^{きよう}引^ひく^の菰^{こも}屋^やは^の熟^{じゆく}睡^{すい}せ^い不^ふ意^いを^を移^{うつ}りて
 生^{なま}拘^これ^の怨^{うらみ}を^を泉^{いづみ}下^{した}再^{また}送^{おく}と^と天^{あま}の^の命^{いのち}なる^のか^の兄^{あに}き^ひひ^ひ宿^{しゆく}り^に
 わ^わか^かれ^れ睡^ねる^ると^とも^も兄^{あに}の^の言^{ことば}を^を聞^きき^き別^{わか}れ^れ日^ひ数^{かず}の^の経^へ経^へと^とこ^こに^にま^まが^が移^{うつ}る^る
 とも^{とも}あ^あら^らで^でや^や索^{さが}ま^まふ^ふら^らん^ん仇^{あだ}人^{ひと}の^の所^{ところ}在^ある^るを^をわ^わか^かぬ^ぬ兄^{あに}の^の生^{なま}ま^まは^は一^{いつ}あ^あら^らせ^せま^ま也^{なり}
 あ^あら^らせ^せぬ^ぬか^かの^のこ^ころ^ろに^に過^と世^よい^いう^うか^かる^る悪^{あく}報^{ほう}あ^あや^やが^が同^{どう}胞^{ぼう}の^の天^{あま}神^{かみ}地^ち祇^ぢも^も憎^{にく}れ
 けん^{けん}あ^あら^らせ^せ世^よ界^{かい}の^の月^{つき}も^も日^ひも^もか^かく^くま^まを^を照^てら^らし^しま^まら^らぬ^ぬ軟^かと^と声^{こゑ}が^があ^あら^らし^し眼^{まなこ}を
 睜^あら^らせ^せ蹉^さ跎^たと^とい^いく^くそ^そな^なび^び走^はり^りぬ^ぬら^らんと^とま^まれ^れの^の推^{おし}居^ゐる^る人^{ひと}を^を柳^{やなぎ}に^に被^か
 ら^られ^れて^て泥^{どろ}に^に塗^ぬり^り雨^{あめ}後^ごの^の場^ば雲^{うみ}脚^{あし}近^{ちか}く^くま^まご^ごと^とれ^れね^ね恨^{うらみ}の^の血^ちを^をそ^そと^と死^し腸^{ぢゆう}を
 断^きつ^つ孝^{かう}子^しの^の怨^{うらみ}言^{ことば}を^をう^うて^てう^うち^ち咳^{せき}れ^れあ^あら^らせ^せぬ^ぬや^や置^おき^きや^やこ^この^の阿^あ公^{こう}の^の王^{おう}子^しの
 除^{のぞ}母^ぼ世^よと^とて^て耐^たえ^え君^{きみ}の^のあ^あら^らせ^せぬ^ぬに^に響^こも^も老^{おい}く^くり^りと^とも^も汝^{なんぢ}亦^{また}か^から^らぬ^ぬ松^{まつ}刀^{たう}は^は皮
 ひ^ひと^とき^きえ^え一^{いつ}き^き切^きり^りぬ^ぬん^んや^やと^とて^ても^もか^かく^くそ^そも^も屠^と見^{けん}が^が羊^{ひつぎ}を^をう^うて^てひ^ひを^をさ^させ^せん^んより^{より}生^{なま}乃^{なり}

根^ね刺^さて^てぬ^ぬき^きせ^せよ^よと^とい^いひ^ひつ^つ左^{ひだり}右^{みぎ}に^にえ^え之^のれ^れが^がけ^けも^もあ^あら^らせ^せと^と意^いの^のへ^へを^を平^{へい}霸^ば
 か^か引^ひ抜^ひく^く刃^{やいば}の^の光^{ひかり}の^の母^{はは}や^やよ^よま^まて^て志^{こころざし}を^をな^なす^すと^とい^いふ^ふと^と王^{おう}子^しを^をあ^あら^らせ^せぬ^ぬ
 禁^{かぎ}の^の備^び阿^あ公^{こう}も^も困^こ持^ぢの^の國^{くに}の^の忠^{ちゆう}臣^{しん}その^の子^こと^とも^もあ^あら^らせ^せぬ^ぬと^とい^いふ^ふと^と王^{おう}子^しを^をあ^あら^らせ^せぬ^ぬ
 なる^{なる}余^{あな}助^{すけ}け^けて^てほ^ほせ^せよ^よと^と孝^{かう}子^しを^を憐^{あは}れ^れし^し可^{あは}れ^れし^しハ^ハ才^{さい}童^{どう}は^は稀^{まれ}なる^{なる}君^{きみ}余^{あな}の^の
 耳^{みみ}の^のあ^あら^らせ^せぬ^ぬと^とい^いふ^ふと^と王^{おう}子^しを^をあ^あら^らせ^せぬ^ぬと^とい^いふ^ふと^と王^{おう}子^しを^をあ^あら^らせ^せぬ^ぬ
 非^ひも^もあ^あら^らせ^せぬ^ぬ逆^{さか}臣^{しん}も^もあ^あら^らせ^せぬ^ぬ罪^{つみ}あり^りと^と誅^{ちゆう}せ^せぬ^ぬその^の子^こと^とも^もあ^あら^らせ^せぬ^ぬと^とい^いふ^ふと^と王^{おう}子^しを^をあ^あら^らせ^せぬ^ぬ
 為^なる^{なる}奸^{けん}媚^び諛^ゆと^と刺^さ阿^あ公^{こう}の^の母^{はは}の^の仇^{あだ}人^{ひと}を^をあ^あら^らせ^せぬ^ぬと^とい^いふ^ふと^と王^{おう}子^しを^をあ^あら^らせ^せぬ^ぬ
 かね^{かね}に^に放^{はな}す^すか^かじ^じ彼^{かれ}も^も是^{こゝろ}も^も王^{おう}子^しの^のあ^あら^らせ^せぬ^ぬと^とい^いふ^ふと^と王^{おう}子^しを^をあ^あら^らせ^せぬ^ぬ
 人^{ひと}と^とも^もあ^あら^らせ^せぬ^ぬ今^{いま}宵^よの^の贅^{ぜい}も^も龜^{かめ}を^を獲^とる^ると^とい^いふ^ふと^と王^{おう}子^しを^をあ^あら^らせ^せぬ^ぬ
 幼^わ稚^ちく^くとも^も君^{きみ}の^の女^{むすめ}に^にした^{した}と^とい^いふ^ふと^と王^{おう}子^しを^をあ^あら^らせ^せぬ^ぬと^とい^いふ^ふと^と王^{おう}子^しを^をあ^あら^らせ^せぬ^ぬ
 勿^なれ^れよ^よと^と下^げに^に脱^{だつ}と^とか^かこ^この^の下^{した}に^に立^たて^て龜^{かめ}が^が肘^{ひじ}に^に左^{ひだり}右^{みぎ}より^{より}引^ひ捕^とへ^へ推^お

去るとん。これふ打うけられ銑現ハ紛ふくるん母の像見の鮮き刀鞘ハ
 黄金の袴と亀富藏河のはとりめて母新垣が替れまひ一亡骸入るは
 腹なる児とこの短刀の失われこれまきとん澄裾らひし母の仇人
 なる事。既ハ味雲が口より洩らせハ大うこハあるとん。虚実と定う
 たりしふ棄ひまれ一母の刀と打うけられて疑念をくらも實ハ血刀會まじ
 業自得かくてもあうひのちや。罵れハ亀も亦引提一血刀會まじ
 老賊何の忠うあんその身の罪と脱ん乃ハ幼君をさりをり山林に隠れ
 狗黨を集め世と誣人を欺く癖者今立地ふこれを討ま誰ハ忠孝の
 人としづれ王子が處て刃と受よといふ声さハかひぐし替ハ斬らんと
 させあうり阿公ハ證據をとりて脱んとするハ言語なく。面を赧く成
 蒼々なり。齒もるれ齒を切りて脱あがり。額髪の針のおとくなれ
 走らうぬふ振揚てあうり。眼の光り星のま。炎のこれ息を吐れ今
 何をう隠ひべき。その短刀と棄ん乃ハ富藏河のわたりめて孕婦と刺殺し
 走り去らるりのハこれなり。返替あさせれと名告うけつ。懐剣を切り
 と抜て打かするをひらりと替う受とじり。刃の光りめちもふ亀が右手より
 替太刀と拂ひ退けつ。まろひと老女ハ似げられ手練の太刀をら右
 を柱の左を替つ。いとも烈しく戦へハ王子ハ處て堦の上よりまろひつ
 彼此とま繞れどもせんそんなく。漣洒るる声を揚替舞とやんあじ
 まで阿公とやく逃よりし。と危しとさめあハ側杖替れまあさと頻あえ
 くる阿公より。猛く勇める替亀も。あうり替う。刃の隙ハ阿公
 を足を飛して燃あうれ。蕉火一度ハ踏滅せハ勿心地舊の鳥夜とあうり
 替太刀さうに定うか。送ハ氣息を候て丁と替てハ跡ハ引れ亦替

去るとん。これふ打うけられ銑現ハ紛ふくるん母の像見の鮮き刀鞘ハ
 黄金の袴と亀富藏河のはとりめて母新垣が替れまひ一亡骸入るは
 腹なる児とこの短刀の失われこれまきとん澄裾らひし母の仇人
 なる事。既ハ味雲が口より洩らせハ大うこハあるとん。虚実と定う
 たりしふ棄ひまれ一母の刀と打うけられて疑念をくらも實ハ血刀會まじ
 業自得かくてもあうひのちや。罵れハ亀も亦引提一血刀會まじ
 老賊何の忠うあんその身の罪と脱ん乃ハ幼君をさりをり山林に隠れ
 狗黨を集め世と誣人を欺く癖者今立地ふこれを討ま誰ハ忠孝の
 人としづれ王子が處て刃と受よといふ声さハかひぐし替ハ斬らんと
 させあうり阿公ハ證據をとりて脱んとするハ言語なく。面を赧く成
 蒼々なり。齒もるれ齒を切りて脱あがり。額髪の針のおとくなれ
 走らうぬふ振揚てあうり。眼の光り星のま。炎のこれ息を吐れ今
 何をう隠ひべき。その短刀と棄ん乃ハ富藏河のわたりめて孕婦と刺殺し
 走り去らるりのハこれなり。返替あさせれと名告うけつ。懐剣を切り
 と抜て打かするをひらりと替う受とじり。刃の光りめちもふ亀が右手より
 替太刀と拂ひ退けつ。まろひと老女ハ似げられ手練の太刀をら右
 を柱の左を替つ。いとも烈しく戦へハ王子ハ處て堦の上よりまろひつ
 彼此とま繞れどもせんそんなく。漣洒るる声を揚替舞とやんあじ
 まで阿公とやく逃よりし。と危しとさめあハ側杖替れまあさと頻あえ
 くる阿公より。猛く勇める替亀も。あうり替う。刃の隙ハ阿公
 を足を飛して燃あうれ。蕉火一度ハ踏滅せハ勿心地舊の鳥夜とあうり
 替太刀さうに定うか。送ハ氣息を候て丁と替てハ跡ハ引れ亦替



本言曰別月本道年一巾卷之三

まさるるさひし出ふ薩摩海へ推演り何はまれ一藝を習ひおわえて故國へ
 久く用らるることやと膽太くもさひ定めて大日本へ渡海し大隅
 國大泊ふ二年のありのさそりて唯一神道の奥我とてつ孫便はき
 肥後ふ赴れ阿蘇の神社へ糸結してくま且く旅寝せしう彼明神
 のおふの賢宮ふ弱官よかたひひよられいさめわね箱籠の楫を枕
 の化する契よ羞て名告は各もあはれあひんすまでの紀念とて即ハ
 差副の短刀とそがまうりてこれより吾ハ亦懐る巻袖と取出
 即ふ贈りて果敢まうも起りせし次の日に稀は夕え故郷の風の後りハ
 赦免の沙汰高船は便船して中がてとゆる琉球國官府おやえちられ
 つかうはさういせなれ父ハ罪赦されて本領の二ヶッ北谷の刈切と返り賜
 り大國の神道を受侍人恩しめのことと託女の長小なれれば北谷の

女王と称られ夥の託女は册れ按司よもまの富貴に流名を雪る
 喜しは樂忽地哀との本れといハ恥しや日本の人と下夜さの契り忽地
 有身て月をかぎゆる身の幅ハあふもほあひられどとのみり母ハ
 父えなハ神まつつられ捉お時くと官家の崇腹れがうて人志ハ胸を
 苦しめ行はせよ中ハ臨月ハ人ハ告を産おとせ玉を欺く女子とい
 不便あはれども養人中りあはれればあや夜密は抱抱きて北谷の属村
 乃れ濱川の里は棄日本の郎が贈りし九寸五分の短刀と襷袢の紐
 は結そえておつしゆるれども涙は踏まりのくその目も又翌去
 めそこの空のこらち瞻め何処の人お拾れし我の中ハ食れさ
 出ひらつ送る日ハ夥の年ハ経られども忘れなれ女児がゆえをわかれ
 託女の長夫りなき日のあふは不淫よふその日本なる郎へしる様

とあつて壯を他ふるに。よる年かこにせられけし。大膽いよ。愚おかりて會つる
 公いとぬう。欲め惑ひて中婦君と利勇が奸討よかりけり。賢明の父え
 ましはせし。王女と亡ひちまふ人にして。ゆめゆめ毛國典よ着破られて。此
 谷を追れ。利勇が扶持もよらて都のほとりに潜ひてどり。まほさる子ま
 中婦君の奸惡を翼んとて。利勇ホと謀りあひ。民間ある赤子と竊三
 て中婦君の産多し。といひせん。母あひびく。彼此を徘徊。富花河の
 このこが。郊原お病卧と女房が臨月なつを。そり。それ。子まもど
 欺て。茶買へては。そのを遠離。孕婦の腹を裂きて。腹なる赤子。及
 引出。婦が今取よいと。短刀こそけり。のども。名をあるよどが
 と。なりもせ。え。送。お。べ。物。な。ら。ば。と。これ。人。お。養。ひ。ま。り。件。の。赤。子
 を。利。勇。は。虚。言。して。後。は。彼。短。刀。と。つ。と。く。え。れ。ば。え。も。忘。れ。ぬ。年。九。年
 されつ秋葉。女児が襁褓の紐へ結び。送。り。たる。日本。の。郎。が。像。見。の
 一口。粉。の。やう。な。鞠。の。浮。亀。原。未。の。が。ま。に。殺。し。し。れ。孕。婦。の。菓。の。上
 より。捨。り。女。児。お。の。り。な。る。り。さ。の。浅。す。れ。西。行。ま。て。り。と。百。遍。悔。ひ。千
 遍。悔。ゆ。と。せ。悪。業。と。り。も。久。ら。と。隱。隱。の。惡。報。の。悲。之。却。強。慾。と。倍
 つ。ら。ざ。ら。と。り。し。う。な。ぬ。三。び。と。ひ。く。と。女。児。が。長。人。と。と。定。う
 なが。孫。養。ひ。赤。子。の。が。孫。あり。此。の。世。子。ま。た。れ。琉。球。王。と。な。り。ん。ま。
 女。児。の。非。業。の。死。代。て。赤。ゆ。り。か。れ。洪。福。あり。と。深。念。を。と。れ。を。未。憑
 なく。その。ゆ。め。の。ぬ。く。隱。して。孫。が。成。長。を。ま。り。と。も。矇。雲。が。幻。術。か。り。
 俄。に。小。園。王。中。婦。君。も。お。は。じ。日。も。薨。れ。と。の。人。の。利。勇。へ。王。子。の。衛。傳。れ。
 南。風。原。の。城。へ。楠。籠。王。牛。角。の。勢。ひ。を。張。り。の。う。ら。と。う。く。し。く。冠。を
 孫。ま。と。と。り。れ。も。つ。孫。の。王。子。新。主。と。そ。の。敬。せ。ら。れ。既。お。六。年。の。月。も

椿説弓張月拾遺篇下帙卷之三

日ぬ。つが手にこれをもちり育れハ身よる年ハ惜くも只孫が父とある
 を俟バ又あやゆくに内乱あよつて大臣利勇ハ為朝ヲ移れ日ハ汝
 同胞ヲれを逐ふて母新垣ガ仇人と呼びつけ前中城按司毛國丹ガ二人
 の子ぞも鶴亀と名告りしとれよふりの孫とつら女塔の名字をばめ
 てある悔しと遮莫との王子ハ鶴亀ホガ身ハ矇雲亡びて孫王子ガ
 國を普く御るふ至るハ二人の兄ハ從一品國舅國相の高位高官ガ
 極んもいと易し脱あきさむやとあきども奉旨なれば告るふしなく
 その短カと鏡現ふ寃を外して打つけしハ環のあせもあつ人日に骨肉の
 真を告王子の佐よなきんむとあつれ方便ハ曉らぬ支堂衛上平霸
 安策ホガ不思議小亀を生拘身なればそらうらげ懐愛くつら胸中を
 ちりせんともひなごらひよるまきのなれまきにその剛臆を弑んとく

首を切しと下知せしと實言とぞ人の穢見の王子ハコケるお忍びつる毛
 國丹ハ國の忠臣その子ともらむらむらして洩せん命を助よと禁せらるま才
 めのいともませし怜悧と自然と憐む兄の情ハ証ハ誣くく白刃の下
 よありつらつれを罵る亀ガ勇敢額の間ハ身を躲してまみ救はしつ
 智畧これつらひしと教るハ親の仇人を替んとて百折の艱苦ハ厭
 へどもあるとつれハ王女ハ供奉しと蒙雲に生拘られ利勇ガ為小橋となれ
 とも忠孝の志移ら天の祐をばつれハあや長川の敗軍ハ汝ハ兄のミ
 替れを今亦こたつれをえて母の仇人とよせめらせ勇士の廣言道理
 お稱ふその健氣さよ自の好曲を羞且ハ邪念の角も折れ孫ヲ導く
 浅瀬川ふられ志心ひは濁りれとよじめて曉る天訓ハ尚寧王の繼あるを
 王子と稱して世を欺き王女為朝の討死を身の幸と認ひてその浅言を

春分月長月合體下巻之三

折り取入祭の賢小假托て人を殺して賊をなす太山の奥の深山樹の
 根あつたおのう強悪を細溪川小影入えて清くちがらふ孫鶴亀忠孝お
 ちひ比まの今さら悔しく恥しくせめて罪悪を滅せん為小天孫氏の也
 廟の前まで王子とつりつれ孫を殺し年長なる孫鶴亀よおまねんとし
 定められ少辰踏消しと暗れ紛れぬ此ころり」とあふさるや疑はしく
 影あつた月を燭ふこれを見よつら生血と王子の鮮血とひとよありて
 骨肉の真実あふめいしつり相夫ありませ毒悪の祖母の懺悔を
 笑つたて首を刎く忠孝の名を揚家と興せしと人の孫あふさるら
 つれ疎ふおりのあふ孫とつら手お年お等なるをさなれりのま
 へおまを可愛さあまれとぬれとつひのあふさる刺殺せ老が春
 とを癡麻れつらとお刃やあてんともおひ定めと目おあの中お涙を甲夜の

相夫のま
 中一の太
 する日の
 相夫の説
 後の巻
 さらえり

驟雨より。おは降そげと刃の錯をほひ流さんともは母見と殺し又
 孫を殺して孫お等々も因果觀面脱まね懲報などて首を刎がれ
 といひ激せごも刃のよつれ息の下なる物ごうりに孫鶴亀あつて嘆息し
 つら外戚の祖母あつて。とらさるよおまをうらふ。いづてう刃をあてらるべき
 善悪邪正へとも人の心うらむる聖もいとつら同胞の忠孝よ男はほひ
 を磨れむげても苦あふさる道もなう。母の仇人と素寛ひ。仇人の母の
 又母あつて世をうらりの儲君の亡父母の遺腹子現在おあふさるら
 ても脱れ國家の刑法族滅縁坐のいひとたがじ。そもいづあれはか
 まふ不幸あつたらふ幸なれや父の忠信母の貞節世あふさるれを罪あつ
 ら。討はし親を親ともあふさるぬおの王子の稱を濫てなうらう父の名と下
 又孫鶴亀の外戚の祖母と孫鶴亀の孫あつても。年お親を慕ひまふ。母の

乃小罪とす。人作天作禍也。定む。やよめありて死せり。
 あり外をばも。足までなると。同胞の草を。袈裟を。刺錯と。あつりし。
 阿公の慌しく。こえりて。声と。激し。愚なり。驚き。あつりし。迫る。も。自殺。
 すること。やめられ。その短刀。日本。つる。母。祖父の賜。今。これを。阿公。や。
 孫。則。孫。も。つら。祖母。と。殺。す。あ。これ。夫。の。刀。に。か。ら。を。
 奪。う。こと。ふ。ざ。れ。た。これ。外。戚。も。困。賊。只。一。刀。は。して。已。れ。ハ。汝。を。
 忠。も。なく。又。孝。も。な。れ。狼。狽。者。人。情。公道。共。ふ。缺。る。人。を。益。の。自殺。次。
 とい。い。ま。す。の。祖母。が。首。を。刎。ざ。る。や。と。物。り。あ。毎。日。漬。る。鮮。血。を。こ。れ。忍。
 ぐ。れ。を。驚。電。の。手。ふ。合。る。刀。を。捨。て。法。然。と。霧。を。候。の。寒。霜。と。漬。る。あ。も。
 又。消。さ。れ。を。啣。す。も。奪。う。の。い。い。と。阿。公。を。膝。を。り。は。して。
 眼。を。睜。て。母。も。これ。を。奪。う。て。瘦。平。愈。さ。れ。と。あ。の。事。も。亦。これ。を。許。

さんやその短刀とと掻よして刃を項に押めてつ。自刎んとて折る古廟
 の内よ声よく老賊阿公自殺させし鎮西八節源為朝とふありと名告
 るべらくしつらと孫祖母向上れ古廟の扉次ひか。為朝王女
 舜天丸の松壽紀平治をねそま出する人の驚電い。面をけ小前と迎へ
 再拜し。去年長川の敗軍の大將奪れりひねと。あ。ひ。定。めて。逆。賊。母。
 堪。ど。ぬ。く。も。歎。れ。と。り。し。王。女。の。う。と。も。恙。な。り。と。ひ。う。け。さ。る。廟。内。は。
 とい。し。と。と。有。が。ら。く。歎。く。と。そ。の。人。と。恭。く。啓。され。は。為。朝。竟。然。と。
 うち。笑。こ。て。つ。れ。鳴。袋。を。て。心。死。を。脱。れ。と。う。は。王。女。は。環。會。佳。奇。呂。森。
 人。の。伴。れ。て。姑。巴。嶋。に。赴。れ。日本。を。出。生。せ。嫡。男。舜。天。丸。及。心。腹。の。先。
 堂。に。り。八。町。礫。紀。平。治。太。夫。の。再。會。し。て。彼。鳴。小。春。を。ひ。う。近。と。う。の。地。
 中。の。り。潜。び。越。来。山。な。れ。陶。松。壽。が。隠。家。と。あ。り。て。宿。り。を。乞。松。基。が。

